



九条はらまち

「はらまち九条の会」会報 No. 189

2012(平成24)年 5月22日(火)発行

＜旧満州国に対する国策や引き揚げの棄民の様子は、現在の原発事故と何も変わっておりません＞

■1945年8月15日、日本が敗戦し、旧満州国にいた日本人155万人は日本国に見捨てられ取り残され、日本に帰国するため、命がけの逃避行を強いられます。■それから66年後の昨年3月11日の大震災や原発事故後の、被災民に対する国や政府の対応は、情報をひた隠して、無為無策でまさに無責任そのもの、国民をあっさり見捨て、67年前の戦争や満州引き揚げの状況と何も変わっていないようです。

避難所にはソ連兵がやってきて
若い女性を拉致し暴行を……
綏化（すいか）の飛行場には格納庫
が五、六棟ありました。そこに二万人
位の私たち難民が入れられ、ソ連軍
から「昼は男性何名を使役に出せ。夜は
十五歳以上の女性を出せ」と命令が
きました。

区長さんと班長さんが名前を言う
と、呼ばれた人は泣き泣き行きました。
子供を置いていく人もいました。抵抗
して怪我をした人、骨折した人、顔がは

ソ連の検問所で「終戦」を知る
昭和二十年八月十六日、ソ連の検問
で初めて「終戦」とわかりました。武
装解除となり、私達は武器はないが、
腕時計や指輪、万年筆等々を取られま
した。何かを出さないと銃を突きつけ
られ、怖くて母は小銭入れのがま口を
出して検問を通りました。

〔前号①②の内容〕……………私達家族は、昭和十三年、宮城開拓団として満州国に入植します。現地の満州人とも心を通じて生活していたが、終戦一ヶ月前に父は召集され、八月にはソ連軍が侵入し、命がけの悲惨な逃避行を体験します。ようやく無蓋の貨物列車に乗ることができたが、多くの悲惨な地獄も見てしまっています。



「へ私の満州体験」その③
地獄のような引き揚げ

相馬市磯部 木村栄子



▲これは漫画家赤塚不二夫自身が体験した満州引き揚げの絵で、妹の寿満子、弟の宣洋さん。寿満子さんの背中の綾子さんは日本に引き揚げ、寝かせて30分後にフーと死んでしまつたという。木村さんの32歳の母のマツ子さん、11歳の栄子さん、5歳の美美子さんもほとんど同じ姿だつたそうです。

れて黒くなった人もいました。身も心もボロボロになつて、一、二日で帰されます。格納庫には夜昼なしにソ連兵が来て、若い女性を人前で強姦、そして拉致して行きます。半狂乱になった人もいました。私は十一歳でしたし、母は妊娠八カ月だったので難を逃れることができませんでした。

た。私達はまだお金があつたので、高くても買つて食べることができました。若い女性性は髪を切つて坊主になり顔には泥を塗り、狂つたふりをしていました。ソ連兵の暴行、強姦、略奪、拉致、伝染病に毎日怯えていました。また格納庫の中の人間関係もいろいろと辛かつた。

さらに哈爾濱(ハルビン)から長春へ八月三十日頃まで緩化(すいか)にいて、また無蓋車に乗せられて移動が始じまつた。列車が止まるたびに、満人の物売りが来ます。川から汲んできた水や、饅頭、ゆで卵、トウモロコシ等。三日も列車が動かないと、どんどん値上がりします。国破れても日本円と朝鮮銀行券は強くて助かりました。

やがて何日目かに哈爾濱(ハルビン)に着きました。学校が難民所になつていましたが、軒下まで難民であふれ、私達のいる場所がないのです。又無蓋車に乗り南に向かつて発車しました。

九月の何日か、長春(新京・満州国の首都)に着き、日橋町の日本警察署官舎が私達の収容所となりました。畳一枚に二人の割合で、私達は畳二枚が生活の場となりました。

ある日、母は私を呼んで……

九月のある日、母は私を石炭小屋に呼びました。私は子供心に悟りました。それは着物の袖の包んだ物でした。食べ物も着る物も無く、お金も残り少なく、どこのお母さんも行ったように、赤ちゃんを産むとすぐに背中であぐらして窒息させたのです。母は「男の子だけど死んで生まれたので」と言いました。墓標なき墓場の大きな穴には、毎日何十人も捨てられます。私はそこに捨てましたが、その時は悲しいとは思いませんでした。

○昨年1月、本会主催・原ノ町駅前の中央図書館で開催した「中国からの引き揚げ・漫画展」に、相馬市から駆けつけた木村栄子さんが事務局に持参された「満州での体験記」です。○原稿用紙70枚に綴られた重い内容で、181・185・189号の3回にまとめ、これが最終号です。○あらためて戦争の不条理や悲惨さや愚かさ、またいざという時にあっさり国や軍隊は国民を見棄てるものだとして強く感じ、原発事故後の国や政府が無責任にあっさり南相馬市民や福島県民を見棄てていることと重なります。○ご寄稿いただきました木村栄子さんには深く感謝し、また木村さんのご家族の皆様のご多幸を、心より祈念申し上げます。（事務局一同）

胡蘆島からようやく帰国へ

長春駅からまた無蓋車で移動し、昼は照りつける太陽で体力を落とし、夕陽が沈むと急に寒くなります。ポン菓子を食べ、塩をなめ、満人から買った川の水を飲んで眠る。南に行くに従い、水分の多い食物が食べられるようになりおいしく感じた。何日かして、港らしい漁村に着き、四キロ位歩きました。中国軍港の胡蘆島(コロトウ)でした。港には日本赤十字社と書いた貨物船が着岸していた。やっと日本に帰れると思った。乗船手続きが始まりました。持ち帰れるお金は一人百円までで、腕時計、金銀宝石、毛皮などはすべて没収されました。

岸壁に三日も置かれ、母と陸子に疲労が出ていました。乗船が始まりましたが、金持ちが優先で、係官に賄賂を渡した人が先に乗ります。私達はお金がないので最後でした。

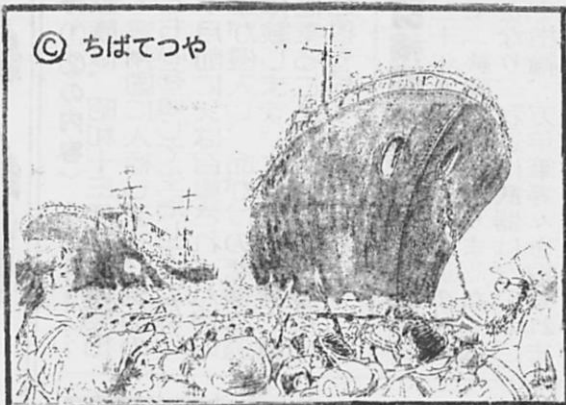


© 森田拳次

これは森田拳次が描いた「引き揚げ列車」ですが、木村さんたちが乗せられた列車も、全く同じ屋根もトイレもない「無蓋車」でした。

引揚船では船底のひどい厩舎に

引揚船の地下一階二階は人であふれていました。私達は地下三階の船底でした。そこは馬の厩舎で、遺体安置室でした。馬糞臭く、蒸し暑く、息苦しい、気持ちが悪くなる所でしたが、内地に帰れると思いい、我慢しました。貧乏人は馬と同じ扱い、遺体以下かもしれない。乗船してから毎晩母は、熱を出し寝汗をかくようになりました。芙美子も陸子も一層栄養失調がひどくなり、元気がなくなりました。朝食に乾パンと水が出ましたが、食べ物三、四回しか出なかったと思います。



© ちばてつや

▲引揚船はすべてアメリカのLST(戦車揚陸艦)など約185隻で行われた。LSTは長さ100mもあり、船底は体育館のように広く、引揚者1,500人を収容した。

「引き揚げ船はこの絵の通りです。金持ちが、係官に賄賂を渡して先に乗船し、お金がない私たちは最後の乗船になりました。しかも船底の馬の厩舎があてがわれ、そこは死体安置所で、私たちの場所でした。」と木村さんは話しています。

船上演芸会も複雑な思いで観た

船上演芸会が開かれ、乗組員の入達が「リンゴの唄」を歌ってくれました。一年間も死と恐怖と向き合ってきた私達に楽しいはずの演芸会でしたが実は複雑でした。引揚援護局乗組員の人達が二十人位いましたが、今までどこにいたのでしょう。早く出てきて病人の世話をしてほしかった。毎日何人も亡くなり、水葬で船は汽笛を鳴らし、左回りに三回廻ります。もう私達は、人が死んでも涙は出なくなりました。

コレラのための舞鶴港で足止めになった牛馬のようになされた

昭和二十一年七月、舞鶴港に入港しますが、コレラが発生したので上陸できません。朝からDDTを体全体に何回もかけられ、陸子は衰弱し食欲もなく、息をつくのもやつのようでした。医学生や看護学生がコレラの便検査を行いました。引揚者全員を四つんばいにして、ガラスの棒を肛門に入れ、三回位あつたと思いますが、まるで牛馬の扱いでした。

数日後に上陸出来ましたが、上陸してからDDTをかけられ、DDTの風呂に入れられ、ここでも家畜扱いでした。体力が落ちた陸子は歩けないので私がおんぶしますが、体重も半減していました。

京都に数日いたが飯盒を盗まれた

それから京都の、引揚者収容所になっていた大きな東本願寺に着いた。そこで大切に使用していた飯盒と重箱を盗まれ、大変困ったことを覚えていいます。本堂の床下には子供の乞食が三、四十人住んでいました。京都には三日位居たと思います。

父はソ連の捕虜になり身体を壊す

父忠志は昭和二十五年一月二十二日病院船でソ連から復員して来ましたが、五年間の捕虜で体はボロボロで虫の息でした。入隊する時に隠して持って行った三百円のうちの百円札一枚を小さく



▲父の忠志さんは、出征の時三百円(百円札3枚)を隠し持ち、ソ連の捕虜生活中は小さくたんで衿に縫い付け、やがて持ち帰ったということです。その「百円札」は、現在も木村家の家宝となっています。

国策に踊らされた父と母

国策に踊らされ、満州の富豪を夢見て満州に渡るが、日本政府、関東軍、長岡三郎部長に見捨てられ、夢破れた父母で、私の兄弟も犠牲になりました。十七歳の私にも辛い経験ばかりで、戦争を恨み人間不信にもなりました。でも実は、戦後のここからが、また苦しい生活の始まりだったのです。

平成十九年十月 (終)